

【書評・紹介】

岸上 伸啓 編著 『捕鯨の文化人類学』

(東京, 成山堂書店, 2012年3月, A5判, 342頁, 3800円+税)

手塚 薫

表紙画像

本書は2008年度～2010年度に実施された国立民族学博物館の共同研究『捕鯨文化に関する実践人類学的研究』と人間文化研究機構主催の国際シンポジウム「世界の捕鯨文化の過去、現在、そして未来」の成果の一部である。さまざまな専門分野にまたがる20人の執筆者が携わってきたそれぞれの専門個別的な研究の成果が盛り込まれており、本文だけで330頁を優に超すボリュームとなっている。通常の商業出版ベースの刊行本に比べ、狭い行間にぎっしりと文字が詰め込まれ、壮丁も地味なために、書店で一般の読者が表題に興味を覚えて手に取ったとしても購入にまで踏み切るかどうか、不安がないわけではない。しかし、先住民捕鯨と日本の捕鯨文化史を中心に、グローバル化した「常軌を逸しているようにも思える」反捕鯨圧力に今なおさらされている少数派側の捕鯨文化の現状を淡々と冷静に記述しているので、両陣営の立場を客観的に理解しようとしている読者にとってその存在は貴重なものであろう。中身もコンパクトに非常によくまとまっており、用意周到に巻末には索引もついており、かつリーズナブルな値段とともにお買い得感が高い。

手始めに本書の構成について簡単に触れる。第一部が「序論」と「世界の捕鯨文化」の2論文から成る「総論」部分に相当し、世界の捕鯨文化研究史を要約し、捕鯨の多様性についても言及している。第二部は「先住民族による捕鯨」ということで、6人の研究者がアラスカ、カリブ海、インドネシア、カムチャツカ地域の捕鯨を取り上げている。第三部の「日本および韓国における地域捕鯨の歴史と現状」では、10人の研究者による8本の論文が所収され、本書の中で最も多くの頁を割いていることでもわかるように、根幹をなす部分となっている。第四部「捕鯨をめぐる現代的問題」では、水産庁の現役の参事官や文化社会学を専門とする大学の講師、および日本鯨類研究所職員の3人によって、国際捕鯨委員会が本来の目的を果たせないでいる理由、捕鯨を掲げる環境保護団体の立場の相違、捕鯨に関わる動物倫理・福祉問題が扱われている。ここでは天然資源をめぐる権力と支配の構造的な関係が中心的なテーマになっており、現代の捕鯨問題や今後の展開を深く考えさせてくれる。

ところで、本書のタイトルはなぜ『捕鯨の文化人類学』なのであろうか。執筆陣は、人類学者、考古学者、歴史学者、民俗学者、社会学者、経済学者、博物館学芸員、獣医師、行政官という異業種分野の混成チームであり、それが本研究のユニークさを醸し出しているのであるが、巻末の「執筆者紹介」(340-342頁)の中で表明されたそれぞれの専門を見ても文化人類学はむしろ少数である。このあたりの事情について編著者の岸上は「おわりに」で以下のように述べる。

「文化人類学は、人類の持つ普遍的な側面を追求しながらも、差異や多様性を強調することによって、現象を相対化させ、理解を試みる学問であると言える。現在、欧米人の考え方に基づく反捕鯨の主張が政治経済力を背景に世界中に広がる勢いを見せている。このような状況において文化人類学（者）は、反捕鯨やクジラは食料資源ではないという見方は、世界に存在する見方の一つにすぎず、現在でも捕鯨や鯨食はさまざまな地域で生活の一部として行われている事実を提示し続けることによって、クジラを食料資源として考えない人々に再考を促すきっかけを提供できる」（本文 338 頁）

要するに、文化人類学というあらゆる文化の価値を相対化する見方を利用し、特定の動物に対する価値観や倫理観が世界を席卷している風潮に異議申し立てをし、多様な捕鯨や捕鯨文化の存続に貢献しようとする意図が本書全体に込められているのである。

専門書を読むときに、研究の狙いや編集方針を評者は何よりも重視している。ピーター・ドゥラッカー張りに言うならば、（研究）組織をして成果を挙げさせるための課題として重要な項目の一つに「組織に特有の目的と使命を知る」というものがある。これを探る手がかりを本書の中に求めるとすれば、岸上の以下の文にそれは端的に表れていると考える。

「本書のすべての筆者は、これまでの研究にもとづいて、クジラは食料資源であり、特定のクジラ資源が持続可能ならば、捕鯨を是とするという主張をしている」（「おわりに」本文 337 頁）

「本書は世界各地の捕鯨の歴史と現状、捕鯨をめぐる現代的な問題を紹介し、できる限り学際的に検討することを目的としている。さらに本書の成果にもとづいて捕鯨問題に提言を試みたいと考えている」（「序論」本文 20 頁）

評者は、通常は問題の告発を得意としている文化人類学という学問が、問題の解決という実践的活動面にも有効であるとのスタンスをとっている本書の執筆者たちの潔い思い切りのいい姿勢に強い共感を覚えたことを表明しておきたい。ただし、それぞれの執筆者たちが担当したすべての論考の中で、問題の解決に向けて十分に踏み込んだ議論を展開できていたかと問われれば、率直に言っていささか不満が残った。確かに性急な解決策を望むより、問題の本質を正確に探り当てることでその後の解決の糸口を見つけやすくなる場合もあるには違いないが…。

人間の文化や生活様式の差異や多様性を明らかにするという文化人類学のオーソドックスなアプローチに関しては、本書の第一・二部で詳述されているように、世界各地の生存・地域捕鯨が歴史的にも文化的にも多様な形で存続してきたことを知ることができる。肝要なのはそれらの知見をどのように捕鯨問題の未来につなげていけるかということである。

この点では、首都圏 560 人を対象にした丹野大と濱崎俊秀による「日本人の鯨食観—二〇〇八年首都圏データ（五六〇人）は語る」は興味深かった。現代日本人の 20 歳代の 51% がクジラを食したことがないのである。食した経験がないと回答した人々は、「動物権の保護」に同意するに従い、鯨食普及に反対する傾向が見られたという。他に鯨食料理の普及を妨げる要因には、市場で販売されている鯨肉が高いというイメージと食糧自給率を特に向上させようと思わない意識が指摘されている。捕鯨モラトリアム発効の直接的な影響が、日本においてもついにここまで及んでいたのかという事実には衝撃を受けた。予想外の発見として、日本のマスメディアは鯨肉料理普及に肯定的影響を与えていることが明らかになったことが挙げられる。若者の関心をつなぎ止める上でメディアの力は侮れない。

牛肉より高い鯨肉は今や富裕層の味覚となって若い人たちの食卓に上らない、と李善愛によって「韓国の捕鯨文化—蔚山地域を中心に」で報告されている韓国の事例は、日本との共通点でもある。鯨肉の価格が高いことは、「変容する鯨類資源の利用実態—日本の鯨肉流通について」を書いた遠藤愛子も指摘しており、さらなる消費の拡大には離島漁業再生支援金制度を利用したゴンドウ肉などの新たな商品開発の努力が欠かせないとする。どの程度実効性が伴うか予断は許さないが、問題解決に向けての具体的な方策と捉えて評価しておきたい。

我々はともすれば、日本では古くからどこでもごく当たり前前に鯨食に慣れ親しんできたと思いがちである。しかし、本書に所収された赤嶺淳の「食文化継承の不可視性—希少価値化時代の鯨食文化」によれば、戦前から西日本を中心とする偏在食のままであり、高度経済成長期に目に見えない形で、魚肉ソーセージの原料として「国民食」の立場を獲得したが、現在では家庭で鯨肉が消費されることは、一部地域を除いてほとんどないという事実を指摘している。外部環境の変化に応じて、柔軟に変化する食習慣という性格を考えると、今後の鯨食は量よりも鯨食という選択肢が存続し続けていることの方に意義があるのではないか。

岩崎まさみと野本正博による「日本における北の海の捕鯨」では、「商業捕鯨」と「原住民生存捕鯨」という2大カテゴリーに含まれない「小型沿岸捕鯨」の分類が重要であることを主張している。商業性はあるものの、地域コミュニティに根ざした地域性の高い、社会・文化的に重要なこの「小型沿岸捕鯨」を維持していくことに現実的な妥協点を見いだすことが求められているのかもしれない。先住民生存捕鯨といえども、クジラの肉類が現金による販売を通して商業的に流通している実態を明らかにした岸上の序論（9頁）に照らすならば、両者の垣根がこれまで考えられていたほどには大きくないことが公になった。

いかに理不尽なように見えようとも「クジラは食料資源ではない」あるいは「クジラに動物福祉の精神を求める」意見にも耳を傾ける寛容な精神も保持しなければならないことは言うまでもない。クジラ資源が持続可能であるという前提ですら、絶対に揺らがぬという保証はない。さらに、クジラのような捕食者を取り除けば、被食者としての魚を保護できるという単純な論法にもネットワーク科学の立場から否定的な見解がある（ブキャナン 2005）。クジラは商業的魚種をえさにしているだけでなく、その捕食者をも食べているからである。海洋生態系は計り知れないほどに複雑であると同時に不安定であり、この方面の論議には海洋生物・生態学者の参加が不可欠であろう。お互いに対する無用な偏見や誤解を取り除くためにも、いろいろな局面で捕鯨／反捕鯨の枠組みにとらわれない「直接的交流」をはかる努力がこれまで以上に求められよう。その意味では今回のように、「クジラは食料資源であり、特定のクジラ資源が持続可能ならば、捕鯨を是とする」研究者だけからなる共同研究を志向するのではなく、反対の立場の代弁者、具体的にはクジラ資源が持続可能ではないとする自然科学者や日本の実質的な鯨食文化のスタートは戦後のことにすぎないと見る歴史学者、あるいはクジラを環境保護のシンボルとして活用しようとする立場の人々などをも巻き込んだ形で議論が継続していくことを、本書の執筆者たちに今後の課題として強く要望しておきたい。

参考文献

ブキャナン、マーク

2005（2002）『複雑な世界、単純な法則—ネットワーク科学の最前線』坂本芳久（訳）、草思社、東京
（てづか・かおる／北海学園大学）